

## 1. 巻頭言

### 《神学部学生会ご紹介》

学生会長 米本 裕見子

主の御名を心から讃美します。私たち神学生のために、いつも尊いお祈りと具体的なご支援を、改めて心から感謝します。ありがとうございます。神学部学生会は、神学コースの学生を中心に構成されていますが、人文学コースの学生にも開かれており、全体の運営推進を担う役員会（副会長：吉田尚志、会計：福久織江、書記：河端真理子）と、チャペル委員会、学祭委員会、対外委員会、学内委員会によって運営されています。活動の目的は、親睦、学び、伝道、信仰の成長などを通して神のご栄光を現すことです。ともに主を見上げつつ各委員会が自立して役割を担っており、ここまで守られています。

今年度の前半は、公的な行事以外に牧師や元牧師をお招きして、懇談会などが多く与えられました。情報やノウハウ以上に、現場に立つ牧会者の信仰の姿に深く感銘しました。今後は連盟役員の先生方との懇談も順次予定されており、貴重な機会を楽しみにしています。また、新入学生の方々は、様々なことに積極的に協力してくださり、全体的に前向きな雰囲気になっています。忙しい時に仕事が増えるのは辛いものですが、嫌な顔ひとつされません。これまでの教会生活での奉仕姿勢を伺い知り、自省しています。私たちは、ノルマで行事をこなす群れではなく、共に神に仕える恵みに喜び感謝し、楽しみながら奉仕する者でありたいと改めて思われています。

大勢の面前で話すのは苦手な小さな者に、神様から大切なことを教えられています。春休みの引継時は、卒業礼拝、入学礼拝の茶話会の準備・司会という大仕事が続きました。また、総会も開催しました。不慣れなことばかりで、心配は尽きませんでしたが、役員はじめ沢山の仲間の助けによって、ひとつずつ切り抜けてきています。助け合い支えあう仲間が与えられている幸いを噛みしめ、自由でありつつ、一つにされていることを感じています。バプテストの「自立と協力」を体感し学ぶ恵みに預かっているのだと思います。

これからも長年の伝統を尊びつつ、主に喜ばれ、また多くの方々に親しんでいただける柔軟で開かれた学生会となりますよう、祈りつつ丁寧にバトンを繋いでいきたいと思っています。

今後とも、西南学院大学神学部学生会をお祈りに覚えていただければ幸いです。  
心から感謝して一主にありて。

# 目 次

|                           |              |                   |
|---------------------------|--------------|-------------------|
| 1. 巻頭言                    | 1            |                   |
| 《神学部学生会ご紹介》               | 2014 年度学生会会長 | 米本 裕見子            |
| 2. 教員からのメッセージ（五十音順）       | 3            |                   |
| 《今年、取り組んだこと》              |              | 天野 有              |
| 《遅れの会》                    |              | 片山 寛              |
| 《二人の帰天》                   |              | 金丸 英子             |
| 《第二の率直さ》                  |              | 濱野 道雄             |
| 《ヘブライ語聖書の「共に」》            |              | 日原 広志             |
| 《コミュニケーションの大切さ》           |              | 松見 俊              |
| 3. 特集記事                   | 10           |                   |
| 《臨床牧会実習に参加して》             |              | 國分 美生             |
| 《ルワンダ MST 報告》             |              | 米本 裕見子            |
| 4. 学生会報告                  | 13           |                   |
| 学内委員会                     |              |                   |
| チャペル委員会                   |              |                   |
| 対外委員会                     |              |                   |
| 学祭委員会                     |              |                   |
| 被災地支援特別委員会                |              |                   |
| 5. 特別投稿記事                 | 18           |                   |
| 《キリストの同とキリストの無／キリスト賛歌の倫理》 |              | 城 俊幸              |
| 6. 神学生紹介                  | 20           |                   |
| 大学院神学研究科 博士課程後期 1 年       |              | 城 俊幸              |
| 大学院神学研究科 博士課程前期 2 年       |              | 小林 大記・杉山 望        |
|                           |              | 田宮 宏介・余 信鎬        |
| 大学院神学研究科 博士課程前期 1 年       |              | 泉 選也・河端 真理子・國分 美生 |
| 神学専攻科神学専攻                 |              | 大野 裕昭・川端 恵実       |
| 神学部神学科 4 年                |              | 青木 紋子・福久 織江       |
|                           |              | 藤方 玲衣・米本 裕見子      |
| 神学部神学科 3 年                |              | 酒井 朋宏・三上 充・元川 信治  |
| 神学部選科 2 年                 |              | 吉田 尚志             |
| 神学部選科 1 年                 |              | 永松 博・宮田 祐亮・横濱 峰二子 |
| 神学部特別研修生                  |              | 岡田 富美子・加山 献       |
| 7. 編集後記                   | 44           |                   |

## 2. 教員からのメッセージ

### 《今年、取り組んだこと》

神学部教授 天野 有



創世記 1～2 章 4a 節の天地創造の神学的解釈（バルト『教会教義学・創造論』第一分冊）に辿り着いたのは、3・11 の一か月後、過酷な中にもかかわらず時間を割いて被災地を案内してくれた仙台の友人たちとの再会後しばらくしてからのことだった。以後数カ月間は創一 1～2 の部分を訳出（やっとその二年後、3 節の「神の言葉」に関わる個所の訳を再開）。その頃、高木仁三郎氏の次の文章に出会った。「聖書にエコロジー的観点から光をあてようとする試み」はいろいろあるが、キリスト教神学者たちが「十分扱い得ていない問題に、神が創造された世界の性質についての考察の問題があるように思える。私は、私たち人類が地上の生命の「守り人」……であろうとするならば、宇宙全体への理解、とりわけ天上世界と地上世界の区別、地上世界に貫かれるべき自然の摂理についての理解がどうしても必要だと考える。しかし、キリスト者たちはこの点をほとんど考えて来なかったか、きわめて形而上学的にしか問題を理解していないように思えるのだ。……（創一 1 で）天地は創造された、とあるが、それ以降は言わば「地」の話ばかりであり、「天」の話はない。……旧約、新約の他の諸編においては、一層関心は「地」それも人間に集中している。……聖書の全体の体系が人間中心ないし地上世界中心であると思う。ということは、宇宙全体の秩序やその中における空と地と人の役割について……（聖書は）十分な世界観を展開しえていない（ということだ）。……私には聖書には……「地の理」をトータルに把握する視点が欠けているように思えてならない。そしてこの点が、後に科学技術の暴走……につながったのである。その点では、聖書（キリスト教）は、核につながるある種の必然性をもっていたかもしれない」（「聖書は核を予見したか」、『高木仁三郎著作集』第九巻、七つ森書館所収）。こうした氏の聖書への——ヨブ記については留保しつつも——批判的問いにわれわれはどう答えるのか。……

以上のようなことを、ちょうど一年前、或るキリスト教月刊誌寄稿の中で書いた。そして、今年の 2 月 2 日から 11 月 3 日にかけて、創一 3～19（＝創造第一日～第四日）までを一応訳出、これがそのまま今年度の「教義学」の現時点までのテキストでもある。創造第五日の「作業」を再開するのは年明けになるかもしれない。第七日（安息日）まで含め、まだあと三日分ある。高木氏の問いに答えることイマダハルカアタワズ、だが、この一年、希望の光に導かれてきたようには感じている。「なんち

の聖言（みことば）はわが足の燈火（ともしび）、わが路（みち）の光なり」（詩篇 119 篇 105 節）。（2014 年 11 月 21 日、記）

## 《遅れの会》

神学部教授 片山 寛



わが家のトイレには、本棚が据え付けてあり、30 冊ほどの文庫本が並んでいます。つれづれなるままに、取って読むための本ですが、私はそれを「水洗図書」と名付けています。短い文章のアンソロジーのようなものがほとんどで、時々、他の本棚の本と交換します。格言や名句集のようなものは、読んでもすぐに忘れてしまうので、何度も読み返したりしています。

最近、その書棚に『万国奇人博覧会』（ちくま文庫）という本が加わりました。これを読むと、世の中には、実に様々な人がいるものだということがわかって、ほっとしたり首をかしげたり、くすくす笑ったりしながら、少しずつ読み進んでいます。大部分の記事は、およそ何の役にも立たぬ情報なのですが、たまにちょっと面白い、しばし考えさせるような記事もあります。

アメリカのニュージャージー州に、「遅れの会」という、ちょっと奇妙な集団があるそうです。「この会の活動趣旨は何ごとにも遅れをもってすることで、半月遅れの新聞しか読まないこのカルトのメンバーらは毎年、最も優れた遅れのアイデアに、3,000 ドルの賞金を出している」（59 ページ）ということなのです。

確かにこれは奇妙な会ではあるのですが、この本の著者たちが、揶揄と嘲笑混じりに紹介している他の「奇人」たちとは、少し趣きが異なる、結構真面目な会ではないか、という感想を私は持ちました。半月遅れで新聞を読むというのは、ジャーナリズムに踊らされることのない、しっかりした批評的精神を背後に持っているのではないのでしょうか。時間がたったら情報が古びてしまうのは当たり前ですが、その代りに、つまらない情報は捨てて、本当に大切なことだけを選ぶという、心の余裕が私たちにも生じるのではないのでしょうか。

私たちが大事にしている聖書は、考えてみると、2 千年遅れで読んでいる新聞みたいなものかもしれません。2 千年もたって少しも古びない言葉というのは、やはり本当に深い内容と力強い生命を持っているのだと思います。私たちも毎年、最もすぐれた聖書の読み方を工夫した人に、賞金を与えることにしてはどうでしょうか。

## 《二人の帰天》

- 戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし -

神学部教授 金丸 英子



今年も身近な人を幾人か天に送ったが、その内の二人について特に記しておきたい。8月19日に85歳で召天なされた野口直樹先生、11月10日に92歳で召されたチャールズ・ホエリー先生のことである。お二人の生涯を、それもとろわけ晩年のそれを思い起こす時、「戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとし、・・・」(テモテへの手紙2の4章7節)が浮かぶ。口語訳は「戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、・・・」、英訳聖書(NASB)は、「I have fought the good fight, I have finished the race,...」。原典の解析は読者に任せるが、「戦いを立派に戦い抜き」の部分、英語では「よい戦いを戦い抜き」と表現され、それに定冠詞が付けられていることから、「戦った」行為にも勝って、戦ったその「戦い」自体に意味と強調が込められているように思える。それは「走るべき行程・決められた道」の内容にも通じているであろう。

野口直樹先生は、その昔、信仰の手ほどきを受け、バプテスマを受けて頂き、神学部に送り出してくれた母教会の牧師であった。後に全国拠点開拓に抜擢され、現在は仙台・長命ヶ丘教会となっている仙台北教会の開拓・教会組織にあたられた。引退後も福岡、芦屋、若松、鯨の諸教会、最後は仙台北教会吉岡伝道所で働かれた。吉岡伝道所赴任は81歳。在任中には東日本大震災のボランティアを受け入れ(2年半で国内外の延べ3500人)、熱烈な遠距離恋愛を結実させて84歳での再婚と、若者顔負けの日々であった。今年2月に癌が見つかり余命を宣告されるも、転居先の福岡市内の自宅や入院先から亡くなる直前まで講壇に赴かれた。最後まで、醒めた明るさを漂わせ、しかし信仰を語った。

チャールズ・ホエリー先生は、南部バプテスト連盟宣教師として1949年来日され、1983年から1992年の間は西南学院に奉職。院長も務められた。幸いにも晩年の数年間は個人的に交わりを深める機会を得、昨年と今年には直接お目にかかることが許された。今年はお自宅を訪問し、昔話に花を咲かせる時を持ったが、中でも次の回想は記憶に残る。責任を終えて米国に引退なされ、ロイス夫人と悠々自適の中、再赴任の要請が西南学院から来る。「妻と祈ってから決めます。それからお返事します」と受話器を置いた先生に、夫人は「どうして『すぐ行きます』と言わなかったの。いつも西南のことは祈っていたではありませんか」と。それが2度目の西南赴任となったという話である。「本当に」引退した後、自らの財産を日本人バプテストのアメリカ留学の基金として投じていたことは伺っていたが、地元のバプテスト神学校に多額の寄付(関係者からは「enormous amount of

money」と聞かされている)をしたことは何も仰らなかった。92 歳の高齢ながら、倏いご自宅は綺麗に掃除をされて片付き、自炊をし、毎朝 4 時に起きて 3～4km をジョギングし、精力的に手紙の交換をし、毎週の礼拝にはダウンタウンの教会に自分で車を運転し、教会学校まで教えていた。野口先生の訃報に驚き、「健康面では何も問題を感じません」と言って来年の再会を約束したそのひと半月後、本当に突然、まるでその夜に神から呼ばれたかのように天へ帰ってゆかれた。

送る人の数の方が多くなって来た年齢のせいかもしれない。しかしこの時期、お二人の帰天はしみじみと淋しい。

## 《第二の率直さ》

神学部准教授 濱野 道雄



これはつまり、初源の率直さ(ナイヴテ)にわれわれは戻ることができるのだ、ということであろうか。いやそうではない。…現代人たるわれわれは、批判において、そして、批判によって、第二の率直さに向かうことができるのである。(ポール・リクール『悪の神話』)

神学部で牧師になるまでに何を学んで欲しいか。私は「第二の率直さ」(2番目のナイーブさ)と今、思っています。聖書を読む時に、文言通りに、神話的表现のままに、いわば原理主義的に読むことを「初源の率直さ」と呼ぶとすれば、理性や倫理を犠牲にしなければその聖書を読むことができません。なぜなら聖書は一つ一つの書の間で相反する記事があったり、また時代的に性差別等の表現が含まれていたりするからです。そこで、本来その聖書がどのような背景で、何を目指して書かれたのか、理性を使って批判的に、また現実に苦しんでいる人々の声を聞きつつ倫理的にも研究する必要があります。そのために神学部があります。そこでまず初源の率直さを壊して欲しいのです。ただ、その結果「結局、聖書は人が書いたものだから、あってもなくても良い」で終わって欲しくないのです。この段階ではまだ卒業して欲しくない。その研究を誠実に続け、「ああ、聖書は様々な人々の声を通して、その向こうに響く、やはり神のことばなのだ」というところまで行って欲しいのです。これが「第二の率直さ」です。第二の率直さに至れば、聖書を神の言葉として、現代に生きている人々と分かち合って伝道し、時には時代に批判的に語りかけ、現実に苦しんでいる人と共に聖書を読む事ができるでしょう。牧師としてそれだけのスキルと立ち方は身につけて欲しいのです。初源の率直さのレベルでも、それをただ壊したレベルでも、本当に聖書に立ち人と分かち合える説教をすることは難しいですし、

伝道もままならないと思います。神学部の前半は、今まで持って来た狭い初源の率直さを様々な神学に触れることで壊して欲しいし、後半は第二の率直さを築いて欲しいと願っています。

この聖書の読み方の変化は説教に直接関係しますが、牧師の仕事である教会運営にも関係するでしょう。例えば、「人を増やす方法」というものもあるでしょう。しかし初源の率直さのレベルにある人がそればかり研究するのは危険に思えます。ただ数を追いかけて、この世の人々を疎外する組織と同じような教会を大きくしかねません。ただ、牧師になるのに「数なんて関係ない」としか言えないならば、わざわざ組織のリーダーに立たされた者として、また神の救いの歴史に対して牧師の持つ役割の責任を果たしていないようにも思えるのです(牧師がいなくてもバプテストの教会は教会なのですから)。数に関しては、増えるばかりでは無く、減ることが証しになる時代も、戦争中のようにあるでしょう。だからこそ、そのような時にも、組織論を冷静に考え、「蛇のように賢く、鳩のように素直に」教会を形成できるスキルが牧師には欲しいのです。ここにおいても「第二の率直さに」向かってほしい。たかが組織論、されど組織論と。

さらに牧師の仕事である平和づくりにも関係すると思います。初源の正義感だけで平和づくりに取り組むならば、そこに直接関係していない人々には「どこか遠くの話」、「何か参加しなければ裁かれそう」と拡がらないかもしれませんし、本人もいつしか燃え尽きるかもしれません。しかし「どうせ人間のできることなど知れている」とあきらめて欲しくない。やはり第二の率直さ、第二の熱さで、「罪人の、限界のある働きだけど、それでも続けるのだ、これは祈りなのだ」としぶとく希望をかかげて欲しい。そこまで行って卒業して欲しい。

私などよりよっぽど柔軟にこの巡礼の道のりを歩んでくれる神学生の方々に勇気をもらいつつ、私も歩み続けたいと思います。

」

## 《ヘブライ語聖書の「共に」》

神学部准教授 日原 広志



ヘブライ語聖書には3つの「共に」が出て来ます。イム（עם）とエート（את）と（ヤハドからの）ヤフダーヴ（יהדו）です。イムは「並んで一緒にいるが接触していない“共に”」です。エートは「接触している“共に”」です。ヤフダーヴ／ヤハドは「一つになっているような“共に”」です。

旧約概論の講義では、黒板にペンギン漫画で、イムを「真横に応援団長がいる図」、エートを「赤児を抱く母の図」で、並べて表します。そして、それぞれの「共に」についての長所と短所を、分団で話し合わせます。神学部には、「神学コース」生と、「キリスト教人文文学コース」生がおり、同じ教室で共に学んでいます。聖書を知らない人文コース生でも、2枚のペンギン漫画の違いならいくらでも発言できますので分団は話が弾み、こうして両コース生の間に無用の壁が生まれぬよう配慮します。学生達は自らの言葉を通して、それぞれの「共に」にある豊かさと、TPO（時、所、機会・状況）を誤った時の危険性について確認します。すべての長所は短所であり、短所は長所です。人を活かしもするし、殺しもするものです。みことばに優劣はありません。分団発表後、そのことを今度は聖書から確認します。

第二イザヤの「私はあなたと共にいる」において、主なる神は二つの「共に」を使い分けています。イザヤ書 41 章 10 節では「私はあなたと共に（עם）いる」とイムです。41 章の諸民族を召喚した神の世界法廷という文脈において、法廷を支配する主は亡国の捕囚民イスラエルに安全を確証し、「虫けら」でなく尊厳を持った人間であることを肯定し、イスラエルが自分の足で立ち自分の力で弁論することを促し、期待しています。「私がついている！だから、あんたが自分の言葉で語れ！」この時にはイムが選ばれるのです。

一方、イザヤ書 43 章 2 節では「私はあなたと共に（את）いる」とエートです。43 章の文脈において、捕囚民は徒に計算・密約など自力救済に走る必要はなく、解放と帰還をもたらす主にただ信頼することのみが求められています。「私が全部やる！だから、あんたはしがみついとれ！」この緊急避難時にはエートが選ばれるのです。こうして聖書のみ言葉から、学生は、神の愛は一つだが、自由自在なスタイルを選択し得ることを学び、牧会に固定不変のマニュアルがないことを学んでいくのです。

## 《コミュニケーションの大切さ》

神学部教授 松見 俊



神学生の特権は何と言っても寮生活である。異質な他者との共同生活は辛いこともあるが、コミュニケーションの仕方を磨くチャンスでもある。聖書によれば、「人は独りでいるのは良くない」（創世記2：18）と言われており、関係に生きる存在が人間の基本規定である。あるいは、神に「かたどり、我々に似せて」、「男と女」とに創造されたと言われる（創世記1：26－27）。

人間は自分、他者（世界）、そして、神との関係の中で **person** として生きよう に創造されている。（E. ユンゲル “Person und Gottebenbildlichkeit”）。自己関係とは人間の意識の構造であって、何かを行為する自分を問うもう一つの自分がいて、行為を判定する「良心」を人格として掛け替えのない自分の「存在」に当てはめてしまうと自己受容が不能になり、あらゆる病理現象の発端となる。世界あるいは他者との関係において「もの化」、「対象化」が起これば人格としての人は自己疎外される。そして、真の神との関係が確立しないと、ありとあらゆる偶像礼拝となる。人は人格として創造されているからであると言うのである。

いやあ！ここは神学部のクラスルームではなかった！言いたいことは神学生時代、特に、寮生活を通して「他者」としての友人を、友人を他者として受容し、コミュニケーションの力をつけておくことが重要であるという一言を言いたいだけである。最近、気になっていることがある「自己責任」という言葉である。英語にもドイツ語にも「自己責任」という言葉はない。応答責任の主体は自分に決まっているので、あえて「自己」を付加すると、そこでは、国の責任、学校の責任、社会の責任が放棄され、責任転嫁が起こっているということに気づくべきである。「神のかたち」とは「応答責任性」のことであるという定義があるが、「責任」とは **responsibility** から考えると、先だって「呼びかけ」があり、それに「応答すること」こそ、責任の本来の意味である。そこでは、「誰の」「何の」呼びかけに応答するかが問われる。ドイツ語ではさらに明らかである。責任 = **Verantwortung** は、**Wort** = 言葉、それに答えること = **Antwort** そして、それを「動詞化」する **Ver** が付加され、最後にそれを名詞化する **ung** が付加されて成立している。わたしにとって **Wort** とは神の言であるイエス・キリストであり、現実の生活の中で出会う異質な「他者」（レヴィナス）の言葉である。

神学生の皆さん、「助けて～」と叫んでも良いのです。自分の中に潜り込み、「自己」責任なる奇妙な言葉のトリックに引っかからないにしてください。神学生時代、特に、寮生活において、福音を介在して他者と出会い、良いコミュニケーションの訓練を経験して下さい。

### 3. 特集記事

## 《臨床牧会実習に参加して》

大学院博士前期課程 1 年 國分 美生

病院のチャプレン・牧師室の働きとは。キリスト教主義の病院の特色とは何か。そのような関心に促され、この夏 8 月 18 日から 22 日まで、京都にある日本バプテスト連盟医療団の病院で行われた臨床牧会実習のプログラムに参加した。

病院のチャペルは、正面の窓の真ん中の十字架と両サイドがベネチアングラスでできており、外に出られずとも太陽の光と季節ごとに移り替わる風景を透かし見て味わうことが出来る。これはちょっとした工夫に思えた。このチャペルに来る入院中の方々や、付き添っておられるご家族、また病院で働く人々の心のケアを、チャペルの造作も支えているのではないだろうか。

日本バプテスト医療団は他に看護学校や、在宅ホスピスの緩和ケアクリニック、地域医療看護支援センター等も抱える。今回病床訪問だけでなく、老人保健施設と保育園の方にも少しだけ関わらせていただいた。保育園の園児は、現在のところ病院職員の子どもたち数人だけ。だが、そこに赴いてイエスさまのことを子どもたちに短くメッセージするのもチャプレンの大事な仕事の一つである。

また病院での礼拝の少し前に、老人保健施設の利用者の方々のもとにプログラムをもって礼拝のお誘いに行く。その時のさりげない会話や配慮をもって利用者さんに触れる牧師室のスタッフの様子から、学ぶことが多かった。人は互いに顔と顔を合わせ、名前を呼び合うことが大切であることを改めて思わされた。

手洗い実習や老年体験も興味深かった。病院での手洗いはすぐには覚えきれないほどとても細かな決まりや、厳密な手順がある。体の弱っている利用者さんが感染しないように、という配慮であるが、それはつまり今自分がいかに気が散っているかが急いでいようが、まず第一にこれから出会う、配慮を必要とする人々に心をまっすぐむけるという言い換えもできるのであろう。普段の自分の行動を反省させられた。

老年体験は、いろいろな装具をつけて自分が老人になったような体験ができる。目や膝や腰が弱っているということは、日常生活がこんなにも大変で危険なものかとびっくりさ

せられた。これから接するご高齢の方のためにも、また自分自身のためにも、この体験を忘れず他者への配慮に役立てたい。

その他印象的であったのは、以前の利用者さんの描きためていた絵を病院内に飾り、ご遺族とのご縁も大切にしていること。また牧師室の前を通る利用者さんのために、そこで花やメダカを育てていること。病院におけるケアの様々なアプローチの仕方を見ることが出来た。

個人的にはきつい、苦い経験もした。礼拝の時のメッセージを、出来る限りわかりやすく短く作ったつもりであったが、それでも聞いている利用者の方々に届くものではなかった！という反省がある。率直に言えば、自分が神学部で学んでいることなど実は外に出たら何の役にも立たないではないか、というショックで頭を殴られたような体験をし、その日は明け方に、自分のうなされる声で目が覚めた。

自分がいかに失敗せずに、良くプログラムを終えられるか、ではなく、この経験を通して自分がいかに変えられていくか…そこにこの実習の目的があったと気づいたのは、最終日を迎えるころであった。

「変えられなければ、学んだとは言えない」という言葉がある。この実習を通して、誰でもかならず自分自身の課題と対決するであろう。そうであればこそこれから、後輩たちにはぜひこのプログラムに参加して欲しいと思う。

## 《ルワンダ MST 報告》

神学部 4 年 米本 裕見子

主の御名を心から賛美します。

2014 年 9 月、ルワンダ・ミッション・スタディ・ツアーに参加させていただきました。現地で国際ミッション・ボランティアとして平和と和解の働きを担っておられる佐々木和之先生ご夫妻に大変お世話になりました。

この国は、人口の 90%がクリスチャンですが、20 年前、大虐殺という悲しい出来事があり人々は深い傷を負っています。ツアーでは一緒に参加した仲間、佐々木先生から平和構築を学ぶルワンダの大学生たち、加害・被害者が和解し共に生きる村の人々や子供たちなど、沢山の出会いがありました。歌とダンスと優しい笑顔に溢れていました。証を聞き、異文化に触れ、見、味わい、体験し、考え、分かち合い、祈りました。貧困を目の当たりにし悔しさと憤りを覚えました。

和解は、背中を向け合っていた者同士が、仲直りし顔と顔を合わせ支えあえる絆をもたらします。深い和解に至るには時間がかかり、忍耐・根気が必要です。

先生の活動の原動力は、「希望」とお聞きしました。それは村の中で、和解の実を結び新たな協働が生み出されている希望であり、平和に向かう若者にみる希望です。また、苦しみの中にイエスがおられるという信仰の希望です。信仰がなければ、このような活動は継続できません。福音と宣教は切り離せません。神が先生を、召し・立て・導かれ、人々を通して支えておられます。私たちは、背後でともに喜んだり、痛んだりしながら、祈ることによって、神の平和の働きに参与する恵みをいただいています。また、同時にどこにおいても、神は、平和・和解のため、福音と宣教の道具として、私たち一人一人を、召し・支えてくださっていること、そこに積まれている多くの祈りの支えの大きさを実感しました。

また、私自身が、神に、隣人に、自分に、背中を向けていないか。傷に囚われていないか、和解へと解放されているのか。主に問われ続けています。神の和解・平和とは何か。私たちは神に何を示され託されているのか。生かされている意味をこれからも思い巡らし神に応えていきたいと願います。この旅に導いて下さった主、お世話になった方々、お祈りくださった方々、出逢った全ての方々に心から感謝します。

これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちをご自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。

Ⅱコリント 5：18

## 学内委員会

学内委員長：大野 裕昭

主の御名を、心から讃美いたします。

諸教会伝道所のみなさまにおかれましては、日ごろのお祈りとお支えに感謝いたします。

さて、今年度の学内委員は、私と泉 選也さん、青木紋子さん、米本裕見子さん、横濱峰二子さん、そして加山 献さんの六名でご奉仕しました。

学内委員とは、神学部の中でよりよい親睦をはかるために、さまざまな交流イベントを企画・運営する委員です。それらのイベントのほとんどが寮チャペルの終了した後に行われるので、チャペル委員との関係もたいせつです。開催告知と参加不参加の人数集約がまた大変です。何事もマイペース揃いの神学生に、辛抱強く働きかけ促さなければなりません。時に、食材の買い出しや、イベント開催のための協力を得るため欠かせないこともあります。

五月には、新入生を加えての恒例の元干隈キャンパスがあった場所での野外研修会という名の青空ピクニックをしました。もちろん会の始まりには、礼拝形式を取り、讃美と祈りを献げた後に、金丸英子先生からのメッセージをいただきました。その後、新入生から自己紹介をしてもらい、先生方をグループ・リーダーにして全員でゲームをしました。日ごろは沈着冷静な先生方も大張りきりで、意外な一面を見せてくださいました。そのグループ毎に車座になって、お弁当を頬ばります。お天気は快晴で、青空の下で食べるお弁当は格別美味しかったです。腹ごなしが済んだら、恒例のソフトボールです。

九月には、秋の親睦会を行いました。例年は、寮チャペルが終わった後に、寮の庭に出てバーベキューをしていたのですが、寮の外壁補修工事と重なり、今年の料理は、急遽鍋に変更しました。まだそれほど寒くなっていなかったのに、汗をかきながら鍋をつつきました。

十二月には、恒例のクリスマス会が行われます。この原稿を書いているのが十月なので、どのようなプログラムになるか分かりませんが、主イエスのご降誕を待ち望む希望と愛に満ちたものとなることでしょう。キャロリングとして、神学部の先生方のお宅にうかがわせていただくのも、みんなの大きな楽しみとなっています。今年もたくさんの素敵な思い出ができました。

みなさん、ご協力とご参加をありがとうございます。

## チャペル委員会

チャペル委員長：吉田 尚志

チャペル委員会の働きは、神学部の学生が主体的に行っているチャペルのコーディネートや調整などです。2014年度は、以下の5名のメンバーが働きを担っています。岡田富美子、杉山望、城俊幸、元川信治、吉田尚志。今年のチャペルは32回を予定しています。神学生一人ひとりが、神から献身の思いをいただいて学びの機会を与えられています。そして私たちの学びと生活は、全国諸教会の皆さまからの祈りと支えによって守られています。しかし、こんなに溢れるほどの恵みをいただきながらも、私たちは学びや生活の中で少なからず壁に直面し献身の思いが揺らいでしまう時があります。そんな時はこのチャペルを通して、再び神の御心に立ち返っていきたいと思うのです。神に与えられている献身を思い起こす場として。諸教会の皆さまからの祈りと支えを思い起こす場として。御言葉に聴き、祈り、讃美を献げる神への礼拝によって、私たち一人ひとは再び神の使命に生きる喜びを与えられるのです。すでに差し出されている神の愛を、献身を表明した仲間たちや、心を注いでご教示くださる先生方、神が招かれているお一人おひとりと共に受け取っていく。神学部チャペルがこのようにして、私たちが共に神に礼拝を献げる場となっていくことを願っています。

一方で神学部チャペルは、神学部の学生にとってチャレンジの場でもあります。特に説教をさせていただく時の私たちは“まな板の鯉”と言えるでしょう。それは、御言葉を取り次ぐ一人ひとりが会衆の前に晒されるということです。隅々まで評価され先生や学生たちから批判をいただきます。その事を通して私たち一人ひとは自分自身の課題を突きつけられ、説教を語ることに對しての恐れや厳しさを思い知らされるのです。チャペルを通して、説教者としての働きを担うための大変貴重な経験をいただいています。その他にも司会や奏楽、研修の報告、証しと、礼拝を献げていくうえで欠かすことの出来ない、あるいはそれを豊かにする奉仕を経験しています。この世における教会の公の証しである礼拝。神学部チャペルはその礼拝を形づくる一つ一つの奉仕の内実を、身をもって学ぶ場でもあるのです。

導きであり、喜びであり、養いである神学部チャペル。私たち一人ひとりには、説教者として、奉仕者として、または会衆の一人としてこのような礼拝に与る恵みが与えられています。一方で、神の御前にいかなる礼拝が求められるのか、献身者として日々問われています。

## 対外委員会

対外委員長：福久 織江

対外委員会は、西南学院大学神学部および神学生一人ひとりを諸教会の皆様に広く知っていただくことを目的とし、2014年度は余信鎬・河端真理子・國分美生・福久織江・酒井朋宏・永松博の6名で以下の活動を行いました。

### 1) 「西南神学生便り 2014」の発行

神学校週間に合わせ 700 部作成し、日本バプテスト連盟の全国諸教会・伝道所に、全国壮年会連合発行「壮年会連合ニュース」に同封させていただく形で送付いたしました。発行および全国発送に際し頂きました西南学院大学宗教部事務室並びに全国壮年会連合事務局の多大なるご協力に心より感謝申し上げます。

### 2) 神学生紹介DVD作成

例年写真のスライドショーだった神学生紹介DVDを、今年度から動画&学生の音声付で作成いたしました。神学校週間や全国壮年会大会等でお使いいただき誠に有難うございました。

### 3) 神学校週間および夏期研修における神学生派遣窓口

今年度の神学校週間では諸教会・伝道所に8名の神学生がお世話になり、また夏期研修では5人の神学生が派遣されました。神学生受入れに際しご準備して下さった諸教会皆様のご配慮のお陰で、宣教・牧会の現場たる教会で充実した研修の時を持てましたことを心より感謝いたします。

### 4) 神学部学生会誌『道』の発行

企画・編集・印刷入稿等を対外委員会が担い、学生会の広報誌として学生会誌『道』を年に一回発行しております。今年度より全国壮年会連合のご協力を頂き、壮年会連合ホームページに「道」の掲載をしていただくことになりました。お手元に印刷版『道』が無い方でも、いつでもインターネット経由でご覧いただけますので、是非御一読ください。西南学院大学神学部の神学生を引き続き覚えお祈りにて支えお守りいただければ幸いです。

## 学祭委員会

学祭委員長：川端 恵実

2014年11月14日(金)～16(日)にかけて西南学院大学第65回大学祭 西新百道祭が開催された。キャンパス内には模擬店や露店が立ち並び、多くの来場者で埋め尽くされた。「いかがですか～」という客寄せの声が飛び交う中、「ドン！ドン！」と、特設ステージから激しい音楽が鳴り響いた。大学祭は、学生が地域の方々や学生の家族、知人・友人に、学校でどのような活動を行っているのかを披露する場となっている。今年のテーマは「爛満-今きらめく-」だ。皆の笑顔が輝く場所を創り上げ、「来ていただいた方に満足していただけるように」という大学祭実行委員の願いの下、実に100を超える団体が今年の学祭に参加した。サークルの活動が目立つ



中で「神学部」は学生会の活動として学祭に参加している。それは、もともと神学部の校舎と寮が干渉にあった時代に寮祭委員会が立ち上げられ、地域の方々を対象とした「寮祭」が行われことになったことがきっかけとなっている。神学部が西新のキャン

パスに移ったことにより、寮祭ではなく大学の学祭に参加することになった。今年、学祭委員会は神学部を学内外にアピールするという目的の下、4月から約10回の委員会を経て教室企画の準備をしてきた。内容は研究発表、映画上映会、ライブ・コンサートだ。その他にも研究資料の掲示を行い、3日間で40数名の方に来ていただいた。

研究発表では計6名の学生が現在行っている研究内容の発表や研修の報告を行い、質疑応答の時をもって意見を交換した。映画上映では計4本の映画を上映し、上映後は感想を話し合う来場者の姿があった。ライブ・コンサートでは



学生4名と宣教師1名の出演による演奏と共に讃美が溢れた。外部からの来客もあり、「どれも良い歌ばかりで、励まされた」と喜んでいただけた。来客数はごく僅かなものであったが、人数には比べられない喜びがあったことを胸に刻みたい。そして、この喜びが神学部学生会の中で大きく広がっていくことを心から願っている。

## 被災地支援特別委員会

委員長：吉田 尚志

被災地支援特別委員会では、東日本大震災で被災された現地の方々や諸教会のことを覚えた支援活動を行っています。今年度の委員は青木紋子、國分美生、小林大記、米本裕見子、吉田尚志の5名。震災から3年と8ヶ月を経て被災地での状況やニーズが変わりゆく中、委員会の活動もまた模索しながら活動を行っています。主な活動内容は以下の通りです。

- ・神学部東北被災地支援ボランティア（仙台長命ヶ丘教会の活動に参加）。
- ・神学部東北被災地支援ボランティア活動報告。
- ・被災地を覚えての祈り。
- ・西南学院大学一般学生東北被災地支援ボランティア引率者の手配。
- ・原発についての学び会（濱野道雄先生協力）。
- ・西南学院大学ボランティアサークル「いと」との連携。
- ・福島県川内村の支援のための献金呼びかけ。

日々の学びや生活の中で、被災地に対する支援を十分に献げることは到底叶いません。しかしその中で、できる限りの支援させていただこうと委員会の活動が続けられています。8月、仙台長命ヶ丘教会が行っている支援活動に携わらせていただきました。教会が関わり続けている仮設住宅では、当初の頃に比べて現在では半数の世帯数に減ったとのことでした。新しい生活に向かって仮設住宅を出られた方々。その一方で、未だに留まらざるを得ない状況の方々がいることの現実を目の当たりにしました。また、新しい生活が始まっているからといって、その方々の心が全く回復したかということそうではないとのことでした。未だ癒やされていない心で生活されている人々がいるのです。復興という名のもとに改善されていく家やビルや町とは裏腹に、人々の心はあの日起きた出来事と苦闘し続けているのです。その中で長命ヶ丘教会は、そのような方々の直中に共におられるイエス・キリストに希望を抱き、今なお支援活動に出掛け続けています。その先々で、笑顔で迎え入れてくれる方々と今回の活動を通して出会うことができました。いかに長命ヶ丘教会の方々との関係が深く結ばれているかを思わせられました。震災から今にいたるまで、そしてこれからも互いの心を行き交い、結び合わせるイエス・キリスト。私たち被災地支援特別委員会もイエス・キリストに希望を抱き続け、現地の方々や諸教会の歩みにできる限り伴わせていただきたいと思います。

## 《キリストの同とキリストの無／キリスト賛歌の倫理》

西戸崎キリスト教会 牧師 大学院博士後期課程1年 城 俊幸

20世紀の思想潮流として「同・同一性」がありました。それは、全てを同一に統一して、飲み込む力、進歩発展を求める人類の欲望です。グローバル化も、会社の経営統合も、吸収合併も、流行もこれに入ります。言葉も、時間も、形も、規格も世界規準にそろえて飲み込んでいく。グローバル、メガ、ワールドと。「同」の欠点は、個性が失われることです。豊かな個性や多様性がなくなる。弱さ・脆さ・儂さ・むなしさ・貧しさの価値が否定される。

『千と千尋の神隠し』にでてくる「カオナシ」も同じでした。全てを飲み込んで、自分だけが成長して大きくなっていく怪物です。名前がカオナシというのにも意味があります。相手を飲み込んで大きくなったけれど、個性がなくなり、顔を失った。だが、家族を取り戻すため、懸命に他者に仕える千と出会い、千との「対話と交わり」を通して、カオナシも自分の本来性を少しずつ取り戻していきます。

この「同」「同一」の反対が他です。飲み込めない他者、自分以外のもの、支配できない他がある。しかし、他との出会いは、逆に、自分を変え、豊かにする。

コリント教会と同様に、フィリピの教会にも争いがあったようです。相手を低く見積もり「党派心」「虚栄心」から動く者もいた。そこで、パウロは勧告します。それが、フィリピ2章2節です。「同じ愛を抱き、心を共にし、一つのことを思い抱き、わたしの喜びを満たしてくれるように」と。ここで、パウロが「同じ」というのは、飲み込んで同じにすることではありません。「キリストと同じ」という意味です。「キリストと同じ」とは、1節から4節に「励まし・愛・慰め・交わり・憐れみ・相手を優れた者とする・他人のことに注目する」と描かれています。これが、虚栄心を配慮に、党派心を和解へと変えるのです。パウロが求めていた教会の姿です。

「キリストと同じ」とは、相手を自分と同じにさせる力・強制のことではなく、自分の方がエゴを崩し、相手へと近づく。そうすれば、分かち合うことができる。愛せなくても、仕えあうことはできる。それが実現する場が、教会です。エゴイスティックな人間同士だが、それでも互いに分かち合える。

☆

フィリピ2章6－11節は、「キリスト賛歌」と呼ばれます。これは、パウロが書いたものではなく、信仰の先達からもらった伝承であり、当時の賛美歌の断片です。この6・7・8節に

は「自分を固守しない・空しく・低く・奴隷・従順」と、キリストの姿が描かれています。しかし、これは、道徳や倫理の「まじめ・謙虚」「卑下・服従」という意味ではありません。

特に、7節の「無」、ギリシア語ケノーシス、「キリストの無」とは、神が人のために仕える働きです。具体的には、私たちの命を活かすために、キリストは人間になられ、十字架についた。キリストの無は、飲み込む「同」と正反対の出来事です。自分の力を増すために相手を飲み込むのではなく、相手を活かすために、自分を裂いて与える。自分が強くなるのではなく、弱くなる、貧しくなる、乏しくなる。

これは、アンパンマンに似ています。自分の顔を裂いて、お腹がすいている人、困っている人に分け与える。自分が傷つく、痛む。このような相手を飲み込まない愛、同じにさせない愛もある。事実、神の愛は、相手を飲み込まない。イエスは自らの身を裂いて、私たちに近づいてくださった。キリストの十字架の死は、私たちの命のためだった。

### ☆

この世は、みんな愛と力を求めて欲望追求します。相手を飲み込む。力で相手をやつつける。自己実現を求めて競いあい、平和を求めて争いあう。これが「同一性」「飲み込む愛」の結末です。だから、人類にはすべての人の命を「贖う愛」「飲み込まない愛」が、どうしても必要なのです。

「宗教に入ると個性がなくなる」と思っている方が多いですが、私は、正反対だと思います。彼らの言う「宗教」とは、マインド・コントロールによって飲み込む力です。むしろ、キリスト信仰に与ると、個性が豊かになります。なぜなら、キリストは、私たちが飲み込まない。むしろ、キリストが私たちの元に来て下さり、私たちと共にいて下さる。このようにして、私たちは変えられ、与えられた命、贖われた命に気づき、その命に真剣に向き合い始める。そこから、こんな小さな私だけれど、他者へと目を向けて近づき(隣人愛)、心を開いてのびやかに感謝して生きること(永遠の命)ができるようになる。

キリストが十字架にかかって、私たちが「神の子」(神との関係性をもった存在)として生きられるようにして下さった。だから、私たちは、キリストの贖いに与り、与えられた命を、喜んで、他者と分かち合いながら生きるのです。

## 6. 神学生紹介

### 《神のインターフェイス》

西戸崎キリスト教会 牧師

大学院博士後期課程1年 城 俊幸



青野太潮先生の弟子となるべく、西南学院大学大学院での研鑽の時が与えられ、それから3年経ちました。修士課程では、青野太潮先生・須藤伊知郎先生のご指導をいただき「フィリピ2:6－11の存在論と倫理／キリスト賛歌における史的イエスの倫理の反映」(7万4千字)を書き上げることができました。その後、博士課程を受験し、ギリシア語とドイツ語の壁を越えて、かろうじて合格。ようやくスタートライン。日本新約聖書学会会長の青野先生と、専務理事の須藤先生にダブルで指導を受けられる恵みに感謝です。

博士論文のテーマは、パウロ書簡を中心に、「パウロの伝承句と編集」→「パウロの旧約引用」(エリス)→「パウロの予型論」(ゴッペルト)→「パウロのキリスト教的解釈」(ハーン)→「パウロの予型論の関係論的解釈」へと徐々に絞られています。この後、2年かけて仕上げるつもりです。

その間、2012年9月から西戸崎キリスト教会の牧師を任じられ、牧会も途切れることなく12年目、メッセージも延べ2200回。欠けの多い、いびつな器にも関わらず、主に用いられ、牧者として立つことが許されていることが恵みです。

西戸崎教会では、「少子化＋高齢化する教会の問題」に取り組みました。「礼拝のあり方／CSのあり方」を『こどもも一緒にの礼拝』(鞭木由行著)を参考に、1年かけて協議し、「みんな一緒にの礼拝」(西戸崎方式)へと大転換しました。子どもも大人も10時から12時まで一緒にCSと礼拝に参加します。礼拝平均26名が37名へアップ、バプテスマ・クラスも7名登録。「みんな一緒にの礼拝」のあと、一緒に掃除し、昼食を食べ、みんなで歓談。主の導きにより「ヒロくんのドラム教室」(月1回)も「今でしょ！英数塾」(礼拝2回出席・礼拝ノート提出で月謝無料)も始めました。

また、西戸崎教会は初めて「研修神学生」を受け入れたので、吉田尚志兄(盛岡教会大須賀牧師推薦)の「神学生のためのOJT(On the Job Training)プログラム」(実際の牧会の全働きを、3年間で効果的に修得するための実践訓練カリキュラム)に取り組んでいます。

学校でインプット・教会でアウトプットという計画が、神のインターフェイスによって、教会でもインプット・学校でもアウトプットへ。恵みによる恵み(ヨハネ 1:16)に、圧倒される。

こうして、学校でもアウトプット。一年目は「卒論の書き方講座」(10回)、二年目は「ギリシア語中級／聖書を読むためのギリシア語講座」(8回)、三年目は「勉強の仕方・レポートの書き方・講義の受け方」(1回)、「聖書の身読／説教作りのためのアシラム」(数回)、「説教術／説教作りのコツ」(6回)を開くことができました。  
資料請求・問い合わせ先は、tachi757@gmail.com です。

## 《感謝》

研修教会：早良キリスト教会  
推薦教会：常盤台バプテスト教会

大学院博士前期課程 2年 小林 大記



教会でもよくあるように、学内のチャペルや授業などで各々の座る場所は自然と決まってくるものです。私の場合は、全学チャペルでは前から2列目の中央通路左手2つ目の席、神学部チャペルでは前から7列目の中央通路左手そば、寮の食事ではホールの外側の列で窓を背にして中央の机の右手、といった具合です。それぞれの席は、私が西南で学びを受け始めた頃に初めて座った席でした。それぞれの席に座る度に、西南で学びを受け始めた頃から今までのことを思い起こし、悔改めと感謝を心の内で御前へ差し出し、こう祈ります。あなたに生かされて、ここまで来ました、主よ感謝します(『道』No. 34 参照)。

本当に多くの方々のお祈りとお支え、お励ましを頂いて歩んでまいりました。

「どのような苦しみや悲しみを吸うても、  
吐く息は感謝と希望でありますように。」  
(河野進、「一呼吸」)

「こんな小さなものさえも選び祝して  
赦しと生命のことばを託してくださる主イエスよ  
御後に従います。」 (LYRE, 「主の御手につつまれて」)

主に感謝します。主の御名を讃美します。

## 《「ありのまま」から新しい者へ》

研修教会：別府国際バプテスト教会

推薦教会：所沢キリスト教会

大学院博士前期課程2年 杉山 望



今年、ディズニー映画「アナと雪の女王」が大ヒットしました。主題歌「Let it Go」も多くの人に受け入れられたようです。我が家にはテレビがありませんが、それでも「ありの～ままの～」というサビの部分を何度も耳にしました。映画のヒットの理由はいくつか挙げられていますが、その一つとして「自己肯定」を挙げる人もいました。主題歌で歌われているように、「ありのままの自分でいいんだ」と自分を肯定するメッセージが多くの人に受け入れられたのではないかと、いうのです。

一方で、私は自分の「ありのまま」を単純に肯定することはできません。自分が差別や抑圧の加害者でもあるということに、神学校在学中に気付かされたからです。そのきっかけとなったのは、ミッション・スタディ・ツアーやボランティアなどで訪れた、ルワンダや沖縄、韓国、宮城・岩手での出会いと学びでした。単純に知らなかったこともあれば、何となく聞いてはいたけれど自分のこととして知ろうとしなかったこともありました。いずれにせよ、差別・抑圧をする者の一人である自分を、「ありのままでいい」と肯定することはとてもできません。

パウロの手紙の中で、「わたしたちは、神にはありのままに知られています。」(Ⅱコリント5:11新共同訳)と書かれています。神様の前では人間の行ったことは善であれ悪であれ全て露わにされます。しかしパウロは神様にありのままに知られることを恐れていません。むしろそれを自分にとって良いことと考えています。人間の全てを知っておられる神様が、自分の罪をも赦し、福音の伝道者として召してくださったことを、パウロは知っているからです。神様はパウロを罪に捕らわれたままで放置せず、赦しによってパウロを新しい者へと創り変えたのです。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(Ⅱコリント5:17)

「ありのままの自分でいいんだ」というメッセージは、差別や抑圧を受けている人々にとって慰めとなるかもしれません。自己否定や他者否定が渦巻く昨今の社会ではなおさらでしょう。神様も私たちのありのままを受け止めてくださる方です。しかし神様は私たちの状況をそのままに放置せず、私たちを新しく創り変え、永遠の命に与るものへと変えてくださいます。そのことから慰めを受け、そのことに希望を置きながら、主イエス・キリストの和解の業に、謙遜に、悔い改めつつ、従っていきたいと思います。

## 《ヨーダーを読んでみよう》

研修教会：福岡キリスト教会

推薦教会：福岡国際キリスト教会

大学院博士前期課程2年 田宮 宏介



「非暴力による平和運動は可能か」ということが、私の修士論文のテーマです。戦争の悲惨さをわれわれ人類は、その歴史の中で、繰り返し繰り返し、体験し続けてきたにも関わらず、戦争が、なくなる時はありません。なぜ、戦争はなくなるのでしょうか。それは、戦争をしたいという力が常にどの世界にも、そしてキリスト者の世界にも大いに存在するためです。

聖書には「汝の敵を愛せ」(マタイ5:43-48、ルカ:27-36)という教えがあるにも関わらず、その真逆の行為を容認する者たちが多くいるのはなぜでしょうか。暴力を暴力で阻止しようと考えれば、悲惨な戦争が引き起こされることは必定です。いくら自己を正当化しようと、神の目から見れば、戦闘行為を行うものは、おなじ穴のムジナです。もし私たちがイエス様を救い主と信じて、殉教すら臆さない覚悟で、この人生を歩んでいこうとするならば、戦争への容認は、賛同は、そして参加は、愛の律法への大いなる違反と言えないでしょうか。

太平洋戦争中、沖縄では陰惨を極めた地上戦が繰り広げられました。戦争が終わっても沖縄の悲劇は続きます。農民の土地は、アメリカ軍の銃剣とブルドーザーで収奪されました。沖縄のガンジーとも評される阿波根昌鴻さんは、米軍との交渉に当たって決して暴力を用いないことを農民たちに誓わせました。そこには、暴力を容認し、行使する軍人たちと同じ土俵に立つてはならないという、キリスト者としての彼の、強いプライドがあったからです。

みなさんは、ジョン・ハワード・ヨーダー(John Howard Yoder, 1927-1997)という神学者を知っておられますか。彼はメノナイトに属し、20世紀の北米を代表する、絶対的平和主義を掲げる神学者です。彼は、強く激しく、聖戦論者を、正戦論者を批判します。愛する人が襲われたらどうするのだ！ その時には剣を取って戦わないのか！ との問いに対して、ヨーダーは極めて明快な答えを示しています。ぜひ『愛する人が襲われたら』(棚瀬多喜雄訳、東京ミッション研究所、1998年)を読んでみてください。彼の理論を実践することが、戦争をしたがる勢力に対しての非暴力抵抗運動を可能にするのではないかと、私は考えています。彼の理論に興味を持ち、非暴力平和運動の実践に関心を持ち始めたあなた！ あなたはまるで、ヨーダーのよーだー。

## 《しるしを求める信仰》

研修教会：福岡城西キリスト教会

推薦教会：福岡城西キリスト教会

大学院博士前期課程 2 年 余 信鎬



マタイによる福音書 12:38－42 には「しるしを求める信仰」の話があります。本文の「しるし」とはギリシア語で「セメイオン」、すなわち徴または奇跡とも訳される言葉です。イエス・キリストが宣教を行っているとき、ユダヤ人はイエスに自分の権威がどこからのものかを証明するようにとたびたび要求しました。ユダヤ人は出エジプトから様々な奇跡を体験してきた故に、イエスにも同じものを見せてもらい、自分たちを納得させろ、と言っているのです。そのような癖はパウロに I コリント 1:22 で「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが」とも言わせているほどです。しかし、イエスのイエスたるゆえんは従来のしるしでは証明できる性質のものではありません。何故でしょうか？

### 1. よこしまで神に背いた時代の者たちは徴を欲しがる

イエスは生涯、真に素晴らしい「セメイオン」を良く行いました。「五つのパンと二匹の魚」の奇跡のときにも、その群衆は「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である(ヨハネ 6:14)」と言い驚きました。それなのに、パリサイ派の人々はもっと決定的なしるしを要求したのであろう。しかし、彼らは出エジプトのとき主が葦の海を「東風をもって(海を)押し返されたので、(海は)乾いた地に変わり、水は分かれた(出エジプト 14:21)」奇跡を体験したにもかかわらず、主に背いた民族です。そのような人々が、そのようなしるしを見せてもらったところで、それがイエスのメシヤたる身分を証明するものとして、彼らはイエスに素直に従順すると期待できるでしょうか？

このようなパリサイ派の要求に、イエスは 39 節で「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない」と仰います。これまでイエスは、自分がメシヤであるというしるしを見せたことは一度もありません。福音はしるしによって信じられるものではないからです。神の御言葉を聞いてもその言葉を信じる人ができない人には幾ら大きいしるしを見せても、信じるところには至りません。信じません。信じることはできません。勿論人間ですから、かなり驚くことでしょうが。

聖書は言います。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。(ローマ 10:17)」と。

聖書には奇跡に関する記事が多くありますが、それが私たちに信仰を与えるものではありません。奇跡は信仰から出たものですが、信仰が奇跡から出たものではありません。信仰よりも奇跡を望んで、それに従う信仰は「神秘主義信仰」とも言えます。この類の信仰に落ちてしまうと、信仰の正常軌道から外れ、偽予言・偽恩寵・偽証拠でも構わなくなり

ます。それでイエスは、しるしを以ってメシヤの証拠にしようとするパリサイ派の要求に対して「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがる」と戒めたのです。

## 2. 主が見せるしるし

にもかかわらず、彼らの要求にイエスは「預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」と、仰います。それは「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」と言うことでした。これこそがイエス自身の死と復活に対する預言であり、メシヤたる真のしるしになります。この世に現れる様々なしるし（奇跡）はメシヤでなくても行うことができます。出エジプト記 7 章 10－12 節に「モーセとアロンはファラオのもとに行き、主の命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をファラオとその家臣たちの前に投げると、杖は蛇になった。そこでファラオも賢者や呪術師を召し出した。エジプトの魔術師もまた、秘術を用いて同じことを行った。それぞれ自分の杖を投げると、蛇になったが、アロンの杖は彼らの杖をのみ込んだ。」とあるように、この世の呪術師も奇跡を行えます。むしろ、終末の時には「わたしはまた、竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来るのを見た（黙示録 16:13）」というような信じられないしるしまで現れます。

しかし、世の中、誰でも真似できない真のしるしが主にはあります。主はそのしるしをヨナのしるしに譬えました。これは三日三晩、大地の中にいること、すなわち自らの死と復活を言い表したものです。これを信じることができない人をイエスは、罪の都城に住んでいたニネベの人が、むしろパリサイ派の人よりもっと義であり、異邦の南の女王がユダヤ人より賢い、という言葉で戒めました。ニネベの人々は「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる（ヨナ 3:4）」と叫んだヨナに何のしるしも要求しませんでした。それなのに、ニネベの人々はヨナの宣教を聞いて悔改めました。また、南の女王はソロモンの知恵を求めて遠い南の異邦から訪れた人として有名です。

イエスはヨナよりも、南の女王よりも大きい存在なのに、彼らはイエスに身分の証明を要求しました。見ても信じない信仰のない世代、聞いても分からない、知恵のない世代に、ニネベの人々や、南の女王がパリサイ派の審判者になると戒めているのです。

救われる信仰とは、「しるし」によるのではなく「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」ものなのです。

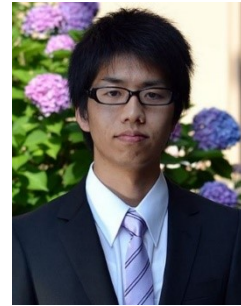
目に見える、確認できる「しるし」が無いと安心できない私たちの信仰。今日私たちが捜し求めているしるしとはどういうことでしょうか？ Ω

## 《情弱？情強？》

研修教会：筑紫野二日市キリスト教会福岡南伝道所

推薦教会：バプテスト野方キリスト教会

大学院修士前期課程 1 年 泉 選也



先日、新しいパソコンを購入しました。買い換えた MacBook Air は性能が高く、そのあまりの快適さに、手に入れてからしばらくは喜びで打ち震えていました。もちろん勉強や様々な作業に対するモチベーションも飛躍的に向上しましたが、それと同時に「もっと早くに変えていれば…」と Mac の素晴らしさを知らなかったことに若干の後悔の念を抱いていました。このように普通「知らない」ということに対しては否定的な評価が下されますが、それは常に妥当するような真理なのでしょうか。

近年、急速な IT 化に伴い、デジタル技術や通信インフラを利用できる者と利用できない者との間に「情報格差」が生じるようになったと言われています。それは社会的・経済的な領域にも影響を及ぼし格差の拡大を生み出します。利用できない者、つまり「情報弱者」の立場に立てば、それは「持たざる者は更に失う」という言葉でも表せる現象かもしれません。

以上が本来的な定義における情報格差ですが、私たちの周囲にはより次元の低い意味での情報格差、情報弱者の考え方があるように思います。例えば、ある共同体の中で、友人や知り合いなど誰かの動向についての情報や、人事的な事柄についての情報があつたとして、「私は知らなかった」という場合を想定してみます。その時、その人は何を思うのでしょうか。もし負の感情が芽生えているとしたら、その人の「共同体の中で自分が知らなかった」ということに対する意識とはどのようなものなのでしょうか。集団についていけない劣等感あるいは知らされていない疎外感？集団の中での自分の位置や地位の確認作業？Facebook や Twitter といった SNS でも情報を手に入れたり、繋がりを求めようとしている人々がいますが、その多くは、知っていなければならないという強迫観念であつたり、自分の知らないところで情報のやり取りをされては困るといった不安に支配されているのではないかと思います。このような現実教会においても例外ではありません。果たして情報を把握しているか否かは私たちの何事かを決定しているのか。そもそも、その情報とは本当に知らなければならないことなのか。本当に知るべきこととそうでないものとは何なのか。様々なレベルで情報に振り回されないことが大切であり、この問題の背後には、他者との正しい関係を見出せていないということがあることを、さらには教会形成的に重要とされる情報共有などについても考えさせられています。

## 《偏見》

研修教会：福岡新生キリスト教会

推薦教会：福岡新生キリスト教会

大学院博士前期課程 1 年 河端 真理子



先日、あるセミナーにおいて『青い目、茶色い目～教室は目の色でわけられた～』という、衝撃的なドキュメンタリー番組を見た。1968年4月、アメリカのある小学校で、人種差別についての実験授業が行われた。ある女性教師が、キング牧師の死後、黒人指導者に無神経な質問をする白人の解説者の傲慢な態度を見て、「子どもたちを差別意識というウイルスから守りたい」という思いから、実験授業を試みたのだという。クラスを目の色で分け、「青い目の子はみんな良い子です。だから5分余計に遊んでもよろしい。茶色い目の子はダメな子です。」というように、青い目の子は優れ、茶色い目の子は劣っていると決めて1日を過ごした。15分も経たないうちに、子どもたちの態度に変化が生じた。そしてさらに、翌日にその設定を逆転させて実験を続けた。つまり、クラス全員の子どもたちが、差別される側の気持ちを実際に体験することになった。一步間違えると子どもたちに傷を残す恐れのある実験だったが、この女性教師の熱意には並々ならぬものがあり、子どもたちを問いただしたり、やや追い詰めるようなシーンも見られた。

ヨハネによる福音書1章を見ると、ナタナエルは弟子となる前に『偏見』があったことが記されている。彼は、弟子となったフィリポからイエス様のことを聞いた時、「ナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」という言葉につまずいたが、フィリポの「来て、見なさい」という言葉に従ってみた。彼は、固定観念で判断せず、行って自分の目で確かめてみたことで、人生が変えられた。

他の国に行ってみたり、考え方や価値観の違う人々と出会うと、なかなか見えてこない自分の中にある『偏見』が示される。「来て、見なさい」と言われ、行ってみたところでも払拭できない『偏見』、『自己中心性』。ナタナエルは、行って自分の目で確かめたから、『偏見』から解放されたわけではなかった、のではないか。やはりどんな時も、イエス様との出会いによってしか変わることは出来ないのだなあと思わされます。

皆様の祈りに支えられながら、十字架と御言葉と祈り、日々の歩みの中で、イエス様と出会わせていただき、少しずつ弟子として整えられていきたいと思っています。

## 《和解と平和に向って》

研修教会：福岡西部バプテスト教会

推薦教会：市川八幡キリスト教会

大学院博士前期課程 1 年 國分 美生



バルトの教会教義学、『和解論』に取り組んで、数か月が過ぎました。学部卒論を新約学で書いた者であれば、大学院でもそのまま研究を進めるのが一般的といえるかもしれません。不安とプレッシャーに戸惑いつつ院での学びがスタート。それでも、望むらくは自分の神学は、新約学と教義学の両輪でやっていきたいという(欲張りな)思いと、「自分には難しい」と避けてきたバルトから学び得たものが、今後の自分の道を支えてくれるものになるだろう、との予感を頼りに、自分なりに励んできたつもりです。どれだけバルトが身に浸透してきているのかはわかりませんが、少なくとも、1 ページも読んだら寝てしまう…ということは、なくなりました！

実はバルトに取り組む以前、漠然と「和解論」を一つのハウツー本のように捉えていました。つまり、教会の中で生きていく自分が、そこで何か危機に遭遇した時、その乗り越え方を教えてくれるものだと思っていたのです。それは、まったく間違いとは言えないかもしれませんが、今はそれ以上のものであると捉えています。テキストを通して、実感をもって「神との和解とはどういうことか」に気付き、そのことによって自分自身が変わられ、その変えられた自分がそこから、隣人とどのように生きていくか… 自分にとって「和解論」を読む意味は、そこにあった。今は、そう思われます。先生方、先輩たちにも心配されながらの専攻替えでしたが、自分の選択に先立って、確かな神の導きがあったのだと感じています。

3 年生の春休みにはタイの神学校へ。今年度 6 月には女性連合の平和学習ツアーに参加して沖縄へ。また 9 月にはルワンダへ。人見知りで、人との対話がとても苦手な私ですが、たくさんの出会いの中で、自分自身の課題と向き合い、癒され、変えられつつあることを、強く感じています。出会いを通して、み言葉が実感を伴って迫ってきます。

現在「和解と平和作り」を大きなテーマとして、新約学を傍らに置きつつ、教義学を中心に据え、修士論文に取り組み始めています。これまでの体験のどれ一つが欠けていても、今の自分はいなかった。そして、これから自分のその体験のすべてが、神学の中に一つに集約されていくのではないかと期待しています。

自分の力や強さではなく、覚えてくださっているお一人おひとりの祈りによって、自分が献身者として立たされていることをあらためて思い、心から感謝いたします。

## 《キリストの愛にいかされ》

研修教会：古賀バプテスト教会

推薦教会：日本バプテスト仙台基督教会

神学専攻科神学専攻 大野 裕昭



主の御名を、心から讃美いたします。

親愛なる兄弟姉妹のみなさま、いつもあたたかいまなざしと、お祈りとお支えに、心から感謝申し上げます。福岡に来て、西南学院大学神学部に学び、最終学年である三年目の日々を過ごしています。ふり返れば、献身に導かれ、2010年に23年間勤めた会社を退職し、その年の神学部受験に失敗し、失意のどん底にいたとき、東日本大震災が起きました。まさに隣人が過酷な状況にある中で、献身の決意が研ぎ澄まされたのを思い出します。家族、親戚、母教会の郡山コスモス通り教会、推薦教会である仙台教会と小河義伸先生、東北地方連合諸教会の兄弟姉妹から、篤いお祈りとお支えによって送り出していただきました。最高の励ましが与えられたこと、忘れられません。言い尽くせぬ感謝をいたします。

2012年から、神学部での学びに気合い十分で取り組んだものの、年齢的な衰えか、ままならない自分と日々格闘することになりましたが、同じ東北地方連合からの献身者である吉田尚志神学生と、親子ほども年齢の若い泉 選也神学生という、素晴らしい二人の神友が与えられ、互いに教え戒め、慰め励まし合うことが出来ました。ありがとう。お先に現場に出て、二人を待つとよ。

福岡ベタニヤ村教会と古賀教会のみなさまにも、のんびり屋の私を寛容さとキリストの愛をもって叱咤激励をくださいました。今もみなさまの笑顔がうかんできます。特に、安藤榮二先生、金子 敬先生、わが師鈴木牧人先生に、牧会者の大先輩として貴重な教えと示唆をいただきました。格別の感謝を申し上げます。

西南学院大学神学部の先生方、宗教部のみなさま、論文指導いただいた金丸 英子先生に、特段の感謝をいたします。とはいえ、神学を、どれだけ学べたか甚だ心もとないのですが、これからも学びを続けていきます。ありがとうございます。

諸教会・伝道所、福岡地方連合のみなさま、よき交わりに感謝いたします。

八田内科の院長八田喜弘先生、副院長の弓子先生、事務長の園村さん、山村さん、職員の方々、大変お世話になりました。ありがとうございます。

最後に、みなさまとまたどこかでお目にかかれる日を、心から楽しみにしています。どうか、お元気で。ありがとうございます。

栄光在

## 《大きな「？」の向こう側》

研修教会：平尾バプテスト教会

推薦教会：神戸バプテスト教会

神学専攻科神学専攻 川端 恵実



私は、イエス様の前に立ちばかる大きな「？」を抱え、どこことなくソワソワとした日々を過ごして来ました。イエス様に関する神学的意味を理解しようとする自分と、十分に理解することが出来ない自分、イエス様を純粋に信じて愛する自分とがぶつかり合っていたのです。その間もイエス様の愛を近くに感じる分、疑問を持つことに引け目を感じて「申し訳ないな」と思っていました。そのような一方で、漠然と「きっと、このような疑問を与えられたのは神様なのだから、神様が疑問をも晴らして下さるだろう」とも考えていました。専攻科の学びも、残すところ後わずかとなりました。天野有先生の「教義学特殊講義」の授業ではカール・バルトの教会教義学Ⅲ/1「真のイエス・キリスト 上/1」(新教出版社)を読んでいます。その予習をしていたとき、私は雲の霧が晴れるような体験をしました。バルトは「イエス様の生は唯一の光である」というテーマについて、それを展開し、理解し、評価することを試みる者にとって、それは疑いを引き起こす厳しいテーマであると語っていたのです。しかも、それは「繰り返し乗り越えなければならない障害物」なのだそうです。大きな「？」の正体、それは「キリスト者が避けて通れない障害物」であったのです。そのことを知ったとき心の重荷が軽くなる想いがしました。

このような私に、イエス様は「あなたがたも離れて行きたいか」(ヨハネ6章67節)と迫ってきました。その迫りを受けたときにイエス様の愛に圧倒され、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」(ヨハネ6章68節)と、ペトロの言葉に自分の想いを重ねてイエス様に応答する自分がいました。長い間、イエス様への疑問を抱えることに違和感を覚えていた私ですが、このように、そのような疑問によってイエス様と出会うことができたのです。

これまで、様々な葛藤の中にあっても御言葉を伝える役目、宣教をする場が与えられ続けてきました。それは、私にとって「イエス様の言葉は命の言葉である」ということを認識する経験でありました。御言葉によって新たな息吹が与えられ、奮い立たされ、励まされる、この喜びが礼拝の中で広がって行くことほど幸いなことはありません。このような経験をする度に「主よ、私を用いて下さってありがとうございます！」と叫ばずにはられません。2015年も命の言葉が世界のあらゆるところで豊かに宣べ伝えられていきますように！「主よ、どうか、私を用いて下さい」という祈りと感謝と願いを持って、今年も学び、歩んでいきたいと思います。大きな「？」も一緒に(笑)。皆様のお祈りと深い愛に感謝して。

## 《ふたつのB》

研修教会：姪浜バプテスト教会

推薦教会：南光台キリスト教会

神学部4年 青木 紋子



他の神学生同様、私も週3日(日・水・土)教会に行っている。しかし驚くことに、ウィークデイ5日間のうち、週4日も片山寛先生とお会いしている(もちろん授業で)。私は現在、卒業論文を片山先生のもとで書いている。先生は中世が専門であるが、守備範囲が広く、何を話しても、なんでも返してもらえる。とても面白い。(だから「先生」なのだと思うが。)

卒論は、「ヒトラー時代のドイツ・バプテスト教会」というテーマで書いている。予定していたものとだいぶ変わってしまった。

なぜそのテーマになったかという、そもそも西南に入る前、仙台でお世話になったある方から「バルトを学ぶ」ことを勧められた。その方から、バルトの講義に出たこと、バルト宅を訪問した話などを伺い、人間バルトの素朴な信仰、自由さ、対話に開かれているところに心惹かれた。そして是非ともバルトに取り組みたいと思った。その足掛かりとして、ヒトラー時代(教会闘争時代)のバルト、あるいは告白教会の神学に取り組みたいと考えていた。しかし、それは人に敷かれたレールであるという感じが否めなかった。正直なところ、私自身の興味はバプテスト史にあった。

教会闘争時代を学ぶ中、ドイツにもバプテスト教会があり、ヒトラー時代を生きていたと知った。そして、福音主義教会の教会闘争とは違ったということを知った時、「ではナチス時代のバプテスト教会はどう判断し、どう行動したのか」を知りたいと思った。それが、私なりのバルトとバプテストの対話になると考えた。そこから現代への問いかけを聴きたい。ドイツのバプテスト史は知らないことばかりで、毎回驚きの連続であり、バプテストが聖書中心、会衆制、各個教会主義、政教分離である意味は本当に深いと思い至っている。

ところで今読んでいるドイツ・バプテスト 150 周年記念誌の中に以下のような一文があって、笑えなかった。「ヒトラーは“どこからあなたは弱まることなきエネルギーを得ているのですか?”という質問に対して、ポケットからボロボロになるまで読んだ新約聖書を引っ張りだして質問者に見せたのであった。」…あの侵略戦争と、ホロコーストはなんだったのだろうか。信仰深い指導者を演出して見せたのである。

聖書をどう読むか、何を聴くかが問われている。バルトがドイツから追放されたとき、ドイツの神学生たちに残した言葉が響いてくる。

「釈義、釈義、そして釈義。御言葉に、聖書に、しっかりと固執せよ。」

## 《すべてを明け渡すこと》

研修教会：鳥飼バプテスト教会

推薦教会：函館キリスト教会

神学部4年 福久 織江



今年の6月2日、盲腸に詰まった結石が原因で汎発性腹膜炎をおこし緊急入院・緊急手術をするはめになった。術後に腸閉塞を起こしたため入院が長引き、大学の授業を1ヶ月休み、6月末の卒業論文構想発表会も欠席せざるを得なかった。昨年の学びで混乱した思考・瓦解した信仰の立て直しも進み、さあこれから本腰いれて卒論だ！と思っていた、そんな矢先のことであった。

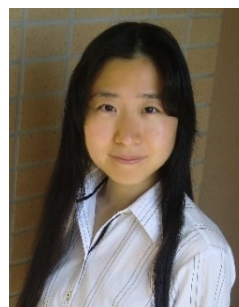
なんで神様この時期にこんなことを？と「即入院&即手術」と言い渡された時には目眩を覚えたが、今振り返ると、私にとって無くてはならない貴重な神様の取り扱いの時であり、解放の時であったと心から言える。術後体調が日に日に悪化していく中で、私に現れたのは癒しの神ではなく、悔い改めを迫る神であった。激痛と嘔吐でのた打ち回っている最中、忘れ去っていた様々なシーンが蘇り、その度ごとに悔い改め神に赦しを乞うた。鼻から腸へ管を通す腸閉塞の治療が3日間続き、まともに眠れず為すすべなく無力感で横たわる中、胃液が腸に落ちていくかすらコントロールできない自分を見つめたとき、この体は自分の所有物ではないことに気がついた。そして私は主を心の真ん中にお迎えしていると言いつつ、実は主に自分を間貸ししているだけで、自分自身の所有権は神に明け渡していなかった傲慢な者であることが示された。深い溜息と共に長い夜が明け窓から朝焼けを眺めている時、ある聖句が何度も聞こえてきた。「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く」。がっくりと膝をつき、自分の物と言えるものは何一つ無いことを受け入れざるを得ない時、人は神の栄光を新たに見上げることが出来るのかもしれない。

入院中そして退院後の療養中も、祈りの力・み言葉の力を、そして主にある兄弟姉妹の存在を、こんなにも有難く感じたことはなかった。この文章を書いているときも、全国諸教会の皆様のお祈りと尊いご支援による守りがひしひしと迫り涙が出てくる。入院中は“留年”の二文字が頭をよぎったが、多くの方々の祈りに守られ支えられ、先生皆様のご配慮に励まされ前期の単位は必修科目も含めすべて履修することが出来た。心から感謝！仕切り直し心入れ替え、これからの学びそして毎日の生活を過ごして行きたい。現在は、「パウロにおける律法と救い」をテーマに須藤先生ご指導の下、卒論に取り組んでいる。人をすなだる漁師になりなさい、この言葉が意味すること、その為に私が作り変えられなければならないこと、それを学び向き合う日々が果てしなく続くであろう。

## 《ヨブには申し訳ないですが》

研修教会：平尾バプテスト教会  
推薦教会：港南めぐみキリスト教会

神学部 4 年 藤方 玲衣



〈たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され／いつまでも残るように。〉(ヨブ記 19:25)

ヨブにとって、自らの叫びを残すためには、皆さんが今手にしている、このような紙とインクでは心許なかったようです。かれは、自分の必死の訴えを聞き流しているような友人の態度に、〈絶望した者の言うことを風にすぎないと思うのか。〉(6:26 後半)と言います。また、38 章では、暴風と共に神が姿を現すのでした。どんなに風が荒れ狂ったとしても、変わらずにそこに立ち続ける、自らの言葉が刻まれた岩を、ヨブは求めたのかもしれませんが。通る者が見上げ立ち尽くすような、壮大な碑文を思い描いたのかもしれませんが。しかし、その願いは残念ながら叶いませんでした。ヨブの言葉は、甚だ心許ない紙の上に残りませんでした(もしかすると、どこかに「ヨブ碑文」が眠っているかもしれません。心躍る夢想です)。2000 年以上もの間、ヨブの言葉は、どこかの立派な岩に刻まれて堂々と佇立していたのではなく、風が吹けば飛び、火がつけば燃える紙の上で生き続けたのでした。かれの言葉は、岩や鉛の頑丈さではなく、人の手と思いによって守られたというわけです。さすがのヨブもこの点では見誤ったというべきでしょうか。いつかどこかで作者がヨブ記を書いたのを出発点に、一文字一文字を人の手で写していた時代、活版印刷術が登場した少し前、どの家でも印刷ができる現在に至るすべての時間を経て、今ここにあるヨブ記は、いったい何代目に当たるのでしょうか。どれだけの手を借りて、ここまでたどり着いたのでしょうか。私の誕生の背景に無数の人間がいるように、ヨブ記の背後にも数えきれない人間の感情、願い、技術など…のわがが存在しているのでしょう。先ほど、「作者がヨブ記を書いたのを出発点に」と書きましたが、作者は虚空から生まれ出たのではありませんから、その後ろにも人のつながりがあります。

私はこの二十数年の間、刻々と変化してきました。成長したり、失敗したり、様々な人のお世話になってきました(これからもそうでしょう)。ヨブ記は、私とは比べものにならない位の長さを生きています。その間には、きっといろいろなことがあったに違いありません。沢山の人と出会ったでしょう。読まれたでしょうし、写されたでしょうし、写し間違われたでしょうし、書き込まれたでしょう。ああヨブ記は生きています。ヨブには申し訳ないですが、岩に刻まれているのではなくて、本当に良かった！

## 《室見川と道》

研修教会：バプテスト野方キリスト教会

推薦教会：南名古屋キリスト教会

神学部4年 米本 裕見子



聖名讃美。

めまぐるしい毎日、一週間、一ヶ月、飛ぶように過ぎていく。時間がないと焦り…心の中で悲鳴を上げ続けて、もうすぐ二年！卒論が…でも、これと、あれと…「100日切ってますよ～、崖っぷちですよ～」と声が聞こえる…「そこをなんとか～」(恩師のキメゼリフ)

こんな生活の中でも心が潤される恵みの時がある。寮から教会までの30分間、<sup>むろみ</sup>室見川<sup>がわ</sup>沿いの土手を自転車で走る時だ。坂なし、車なし、信号なしの遊歩道。ランナー、ウォーカー、犬とお散歩、楽器を奏でる人、景色を眺める人…爽やかな空気の中を走り抜ける。10月。秋晴れの主日の朝は最高。キラキラ輝く水面を右手に、川下から川上へ稜線を眺めつつ、山に向かってどんどんペダルを踏む。川幅も水の音も変化する。土手の芝生も鬱蒼とした茂みになる。水の量も透明度もいつも違うけど、可愛いカモたちが泳ぎ、優雅な水鳥が一本足で立ちつくす。魚が跳ねる。気持ちいい！思わず賛美を口ずさむ。「神さま、今日もありがとう。」心の中で主日礼拝は、歓喜と感謝と讃美でもう始まっている。

水曜の夜はなぜか天気の良い日が多い。雷鳴と共に空が青く光る。(雷が川に落ちたら感電するかな？直接くるかも。主よ！)マルティン・ルターを思い出しながら人気のない暗い川沿いを全速力で駆け抜ける。皆既月食の夜は、刻々と変わる月の表情をチラチラ。ついに自転車を降りてしばらく空を見上げた。強風の日、往路は海風に背中を押されながら、帰りは逆風、身を低くしてペダルを踏む足に力を入れる。どんな日も、この大いなる自然を造られた創造主に思いを馳せて、感動新たに溢れ、心洗われる。そして今日もまた、主が備えて下さった道を素足でひた走る—イエスと共に。「主の道を整えよ！神の大路を平らにせよ！」荒野に響く声に引っ張られ—自分の力じゃ走れない。こちら山あり谷あり、落とし穴あり。雨、雪、嵐…でもこの雲を抜ければ、その上はいつもすっきり快晴。だから主を賛美し続けよう。主の大庭にとどまろう。神の愛と、沢山の出会いと、お支え下さる教会・兄弟姉妹のお祈り、励ましという追い風に感謝しつつ。

主は人の一步一步を定め

御旨にかなう道を備えてくださる。

人は倒れても、打ち捨てられるのではない。

主がその手をとらせていてくださる。(詩編 37:23-24)

## 《打ち砕かれた心》

研修教会：鳥飼バプテスト教会

推薦教会：日本バプテスト名古屋キリスト教会

神学部3年 酒井 朋宏



主から受けたと信じた召命を胸に神学部での最初の学期を迎えた。最初に戸惑ったのは神学書の内容の難しさ。何度読んでも書いてあることの意味が分からない。十数年の教会生活を経たと言っても、神学書と呼べる程の本はほとんど読んだことがなかったのだから仕方ないのかもしれない。ただ素朴に復活の主イエス・キリストを信じて歩んできただけなのだ。

図書館で教科書や参考図書を繰り返し読み続け、結局意味の理解できぬまま家路につくときに感じる徒労感。日々の学びを積み重ねて、近い将来牧会の現場に立てるように成長していかなければいけないのに、悠長に構えていられる年齢ではない(今年42歳)という焦りに最初の数ヶ月は囚われていた。

「主は助けを求める人の叫びを聞き、苦難から常に彼らを助け出される。主は打ち砕かれた心に近くいまし悔いる霊を救ってくださる」(詩編 34:18-19)

ここ神学部では「信仰の打ち砕かれ」ということが言われる。今の私の学びはキリスト者として打ち砕かれた心を知り、主がより近くにいて下さることを知る過程の一部であるべきなのだろう。そして母教会の牧師が言っていた言葉を思い出す。「主の前に自分は何者でもない」。私もこの言葉を体現できる者になりたいと思いながら、なかなか捨てきれないプライドとも戦っている。

神学書も難しいが、あらためて思うのはやはり聖書も難しいということ。「その手紙には難しく理解しにくい箇所があって、、、」(2ペトロ 3:16)とも記されている。私はこの聖書の御言を取り次ぐことに生涯を捧げると決意した。これは自分の経験や力量でできることではない。

聖書は確かに難しい反面、それが私たちに伝えようとする内容は実に単純明快である。「・・・キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです」(1コリント 15:3-5)。この事実は決して揺がない。

いつも支えてくれる母教会の兄弟姉妹、一緒に福岡までついてきてくれた家族(妻と小学生のこども二人)、教えてくださる先生方、研修教会の兄弟姉妹、そして全国諸教会伝道所のみなさまに改めて感謝を申し上げます。

## 《祈られ、祈り》

研修教会：自由ヶ丘キリスト教会

推薦教会：金沢キリスト教会

神学部3年 三上 充



主の御名を賛美します。いつも私たち神学生のことを祈りに覚えていただき感謝です。支えていただき感謝です。神様に導かれ・守られ、みなさんの祈りに支えられ・勇気づけられ、私たちは学ぶことができます。

みなさんの祈りが、具体的に私たちを支えています。私も全国の諸教会の上に神様の守りと祝福が豊かに注がれることを祈っています。また、教会の全ての活動が神様の御心に適ったものとなるよう祈っています。そして、教会に集われるみなさんに、神様がともにいて下さることの喜び・安心・希望がどんな時もあるように祈っています。

全国の諸教会、そしてそこに集われるみなさんのことを祈る時、私もまた祈られているということを心底思い知らされます。そして、私は私の妻のために、母のために、父のために、兄のために、兄の家族のためにも祈りますが、その時やはり彼らが私のことを祈ってくれていることを思われます。そして、私が様々な事情で祈るに祈れない時でも、誰かが間違いなく私のことを神様に祈ってくれていると確信しています。

全国の諸教会に連なるみなさんが、そして家族が、私たちのためにいつも祈って下さっている。この紛れもない事実が、わたしたちを具体的に励ましてくれ、私たちに勇気と力を与えてくれています。ありがとうございます。

そして多くの人から祈られているという事実を思う時、やはり「祈りは聞かれる」ということをも確信します。もちろん神様が私たちに生命を与え、私たちを愛し抜き、私たちの人生を導いて下さっています。しかしそれでも、私が今神学生として存在しているのは、多くの方の祈りがあり、その祈りが神様に聞かれたからです。そして、私のために祈って下さる方が存在しているのもまた、誰かがその方のために神様に祈り続けているからです。誰かの祈りが聞かれ、誰かの人生が神様の御心に適うものへ導かれていく(それは人間の思いとは全然違う形かもしれませんが)。世代を超えて、時代を超えて、国を超えて、誰かが誰かのために祈り続けてきた。それが聞かれてきたからこそ、今の私たちがいると思うのです。もちろん、神様が主権者です。それでも、私たちの祈りは聞かれます。神様の御心に適う祈りであれば、必ず実現されていきます。

みなさんの祈りに押し出されて、具体的に励まされ・勇気づけられて、私たち神学生は今日も学んでいます。祈りによって、神様の御心を実現するために一歩踏み出す力を、今日も与えられています。感謝です。引き続き祈っていただければ幸いです。

## 《からし種》

研修教会：日本バプテスト福岡基督教会

推薦教会：調布バプテスト教会

神学部3年 元川 信治



西南学院大学神学部での学びも半年余りが経過しました。

日々、新しい発見と驚き、問いが与えられ、考える続けることを求められています。そのような中から、1つをお伝えしたいと思います。敢えて題するなら、生命に関する一考察。

生命の特徴、それは、からし種の内に見ることができます。一粒の種が出芽するまで、表面上は、それほど変わって見えないかもしれません。しかし、その種皮の中で起こっていることは、実に劇的です。水、酸素、そして適温は、種子の発芽条件として広く知られています。種子は、それらの事象と‘出会う’ことによって芽吹きます。発芽した後、からし菜は、生長段階に応じて青菜、菜の花、油菜と呼ばれています。

それらから言えること。生命は、絶えず変容すること、さらにその変容は、周りとの関係性の深化を伴うということです。生きているということは、それだけで可能性に満ちあふれています。そして、その可能性は、変化というかたちで具象化されていきます。また、からし菜の呼称の変化を見るとき、そこには葉っぱだけ、花をつけた、種ができたといった外見の変化以上のことが反映されています。背景には人の生活との関わりがあります。“空の鳥が来て枝に巣を作る”という聖書の言葉は、個体の変容という側面だけで生命を捉えることはできない、つまり他者性との関わりの中にその本質があらわれてくることを象徴していると思います。

教会は、それぞれの時代、地域にあって、キリストを指し示す存在として生かされています。そこに与えられている生命も上記の特徴を帯びているのではないのでしょうか。教会としての芽吹き、それは、神との‘出会い’に尽きます。

見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける。(イザヤ書 49:16)

私たちの神が、実にこのように決定的に出会ってくださる方であること、このことの有難さ、不思議さを覚えつつ、この地、この時代にあって学んでいきます。

## 《「神の国」の喜び》

研修教会：西戸崎キリスト教会

推薦教会：盛岡バプテスト教会

選科2年 吉田 尚志



「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」  
(マルコによる福音書1章15節 新共同訳)。二千年前、目の前に迫り来てしまっている「神の国」が、世界を包み込もうとしているその状況をイエス様は人々に宣言された。「神の国」とは一体何なのだろう？

7月に教会で「サマーキャンプ」を行った。真っ青な空、照りつける陽の下で、潮の香に包まれながら海での一時を過ごした。めいっばいはしゃぐ小学生たち。そんなやんちゃな子らの面倒をみる中学生たち。波打ち際には、まだ泳ぐことのできない幼児たちと高校生のお姉さんが一緒に戯れている。砂浜ではお母さんたちが荷物番をしながら皆の光景を温かい眼差しで見守っていた。まだまだ遊び足りない子供たちの尻をたたいてせかし、ご自宅を開放してくださった教会員の家に向かいバーベキューの時を過ごす。仕事を終えて駆けつけてきた教会の方たちも交えて共に食卓を囲んだ。皆の生き生きとした表情が今でも鮮明に脳裏によみがえってくる。振り返ると、この教会の活動も「神の国」での出来事であったのだと私は思う。

苦しみや悲しみ、弱さを抱えて生きていた人々がイエス様の宣教を通して、生きる希望を与えられた。一方、おごりたかぶる者たちは、見せかけの偽善は見破られ、その裏に潜む人間の傲慢さを真っ向から否定されたのだった。その事が一体何を意味するのか？イエス様との出会いは私達一人ひとりに何かを迫ってくる。本当に大切なことが、時に喜びをあるいは苦味を持って迫ってくる。それは、私達一人ひとりが等しく神に愛されているということ。地上にあつての地位も名誉も財産も能力も年齢も関係なく、ありのままのその人が、神との関係にすでに生かされているということである。私達一人ひとりはこの世の価値基準を背景に、一喜一憂する存在だ。しかしそのような自分から解き放たれるよう、イエス様は招いているのだ。神が一人ひとりを愛してくださるその関係に、神に愛されている互いの存在を認め合い、愛し合っていくその関係に、「飛び込んでこい」と待ちわびているのだ。この「神の国」を共に生きよう。イエス様の宣言が今なお響き渡っている。

教会の「サマーキャンプ」。参加した一人ひとりが、自分もそして相手の笑顔も互いに喜び合えたのは、今神に求められている賜物を持ち寄り「神の国」を共に生きたから。教会は「神の国の喜び」に生かされ、それを伝える存在なのだ。イエス様の呼びかけに喜んで応え、生きる教会。そんな教会形成を私も目指したい。

## 《分かっている！は分かっている？！》

研修教会：バプテスト野方キリスト教会

推薦教会：バプテスト野方キリスト教会

選科1年 永松 博



「隣人を自分のように愛しなさい。」(マルコ 12:31)これは私の生涯のテーマです。私の隣人枠は、神学部で学び始めてから、特に広がったように思います。それは単に、神学部の仲間と出会ったからというだけではありません。多くの学びや出会いの機会を通して、沖縄、原発問題、ホームレスの人々、また海外伝道(カンボジア、シンガポール)体験により、世界中の人々との関係性に対しても目が開かれているからです。私は、神が愛しておられる世界中の隣人を愛し、関係性を喜びながら共に生きていきたいと願っているのです。しかし、現実には、その願いとは裏腹な自分がいます。そのような時、隣人は私にとって、こちらに構わず多くを要求する相手、身構えるべき相手となります。私はその原因を、多くの学びやチャレンジにより、忙しさに追われ、心に余裕がない時、そのような傾向にあると分かってきました。

しかし、原因は本当に忙しさであるのか。ここでイエス様の生涯を思うとき、あの方こそ隣人に愛を示すため、方々を巡り、多忙な日々を過ごされた方であったと思います。では多忙な生涯を生きたイエス様は、どのようにして生涯、隣人愛を貫徹し得たのか。

マルコ 1:21 を見ますと、「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」イエス様は、何よりもまず**独りになり静まる時間**によって多忙な日々を始めておられたのです。一方私は、忙しい物事を前にすると、優先順位付けや時間配分(ときに不貞寝含む)には重点を置くものの、独り静まり祈る時間は節約の対象としていました。それは既に 22 年の信仰生活で、独り静まり祈る時間がどれほど重要かという事をおおよそ認識していたにも関わらず、です。

独り静まり祈る時間は、神がこのような私をそのまま愛して下さっているという、もはや聞き慣れ、既に「分かっている」と認識しているその奇跡的で衝撃的な事実を、再び多様な視点で観、感動する事。そして同時に、神に抱かれているその安心感と温もりを体験する至福の時間です。当然の事を長々と書いているとお思いかもしませんが、既に分かっていると思える事を今一度分かろうとし続ける事は本当に重要だと実感しているのです(その点、神学の学びは何一つ分かったなどと思えていない事は恵み?!なのでしょうか…)。

とにかく私は今、神が私に用意してくださっているキリスト者としての道を、独り静まり祈る時間によって一歩ずつ歩ませていただいています。

主よ、どうかいつも分かったつもりにならず、分かろうとし続けられますように。

## 《出会い》

研修教会：平尾バプテスト教会

推薦教会：富山小泉町キリスト教会

選科1年 宮田 祐亮



ハレルヤ！全国諸教会の皆様、いつも私たち神学生のために熱心な祈りと物心両面でのお支え励ましを感謝いたします。今年の4月から神学生としての生活がスタートいたしました。この春からの生活はまさに「出会い」という一言につきます。毎日が新しい出会いの連続であり、楽しく、本当に充実した神学校生活を送っています。共に学ぶ友との出会い、神学との出会い、先生方との出会い、研修教会の皆様との出会い、福岡の地との出会いなど日々味わう全ての出来事が新鮮であり、また全ての出会いを与えて下さった主に感謝しています。

そして私にとって待ち望んでいた出会いもありました。それは献身の旅立ちと共に与えられた第二子となる長男との出会いです。先日、元気な息子との出会いを果たすことができ命を生み出す主に改めて感謝と感動の思いで涙が止まりませんでした。また、夫婦だけでの出産に不安を覚えていましたが、出産後には神学寮管理人の田中さんご夫妻をはじめ、寮生の仲間達、研修教会の方々から様々なサポートをしていただきました。本当に感謝いたします。二人の子の父として、夫としてますます気持ち新たにされ、霊の炎が燃やされています。神学の学び、研修教会での学び、そして何よりも神が与えて下さった大切な家族との時間を両立していくことが私の大きな課題です。

ある哲学者は、「人生は出会いで決まる。」と言いましたが、確かに私たちの人生はいくつもの出会いによって変えられます。私自身も新たな出会いの中で日々成長させられています。また、福岡での新たな出会いに加えて、驚きの再会も与えられ、今まで点でしか見えてなかったものが線としてつながっていく不思議な神様の導きを体験しています。今、教会を超えて、教派を超えて主に連なる多くの信仰の仲間たちが繋ぎ合わせられています。主は必ず御心を成し遂げられるために、仲間を鎖のように繋ぎ合わせて下さることを確信しました。1人1人との大切な出会いは主が与えて下さるものだと思えます。何よりもイエス・キリストとの出会いは最も「人生を変える出会い」と言えるでしょう。この大きな出会いを1人でも多くの人が体験できるように、遣わされた場所で、日々出会う人々との新たな「出会い」を大切にしつつ、歩んでいきます。

“あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。”

詩篇 37:5

## 《時間の秩序と配分》

研修教会：姪浜バプテスト教会

推薦教会：札幌バプテスト教会

選科 1 年 横濱 峰二子



今年の 4 月から西南学院大学へ入学し、今まで生きて来た<sup>みちのり</sup>道程を 180 度転回し、現在、新たな道に進もうとしております。大学での半年間、勉学にひたすら走り続けて参りました。後期に入り授業の面白味が少しずつ解り掛けてきたように思います。

また、そんな中で金丸英子先生は「教会史」の授業開始の前に、ディートリヒ・ボンヘッファーの「共に生きる生活」(新教出版)の一説を朗読されてから、黙想の時をもちます。その諸書の副題の“一日の働き”の中から皆様方と分かち合いたいと思います。

キリスト者の毎日は神の意志に従って〈祈ること〉と〈働くこと〉というこの二つによって特徴づけられている。祈ることにも時間が必要である。・・・一日の労苦と働きなしには祈りは祈りではないが、また祈りなしには働きは働きではない。・・・早朝の祈りがその日一日を決定する。私たちが恥ずかしく思う無為に過ごされた時間、私たちが負けてしまう誘惑、・・・非常にしばしば朝の祈りをなおざりにする事にその原因がある。私たちの時間の秩序と配分とは、それが祈りから出てくるところではいっそう確かなものとなる。・・・必要な力を今日私たちに与えて下さるようにと神に祈るところでは、働くための力は増し加わる。

先日、キリスト者の友人が「朝早くから仕事をして、帰宅時間になると仕事が忙しく、とても『お先に』と抜け出せない。公私ともに時間を上手に使い分けたいのに難しい！」と嘆いておりました。この話を聞ききつつ、私も一日の時間配分に無駄のある自分の姿が彼女と重なって見えました。

ボンヘッファーの「私たちの時間の秩序と配分とは、それが祈りから出てくるところではいっそう確かなものとなる。」この箇所を通して、『私たちの生活の始まりは朝の祈りによって、今日一日の時間を有意義に過ごすことが叶えられる』との示唆が与えられました。

それからの二人は、仕事や勉強が辛いと思いながら過ごす一日が、朝の祈りによって変えられと信じ今まで以上に祈りの時を持ちました。すると一日の時間配分が整えられ、また、その日出会う人との対話の中に喜びが生まれ、充実した時間を過ごせるようになってきたのです。神さまと共に生きる充足感が人の生き方に大きな力となり、秩序ある生活が持てるようになってきたのです。

朝の祈りの時をもち神さまとの関係が整えられ、この与えられた恵みを神さまへ感謝し、また明日を迎えるのです。そこには、神さまとの新しい「義」の連鎖が始まっていくのです。

## 《パン屑のかおり》

出席教会：バプテスト野方キリスト教会

在籍教会：那覇新都心キリスト教会

特別研修生 岡田 富美子



「カデシュ・バルネアを出発してから、ゼレド川を渡るまで三十八年かかった。」(申命記 2 章 14 節) 神さまから西南学院大学神学部での 1 年の学びの時間が与えられました。24 年前、みんなといた神学部です。学舎や人が変わっても無条件に懐かしかったです。かつてお世話になった方がたや教会の友情は少しも変わりません。一足の靴を履いて来たのに、12 足に。服は 33 着になり、ただ感謝です。

沖縄で出会った女性たちの戦争トラウマや父権制からの解放、わたし自身の解放。「神」にその解決を求めました。ところが、授業の教室探し、図書館の利用方法、授業、ちゃんぷんかんぷん解らない。視力は落ちる。自転車から落ちる。「一体わたしは、ここに何をしに来たのだろう。」と落ち込む日々でしたが、教会の祈りや同じ釜(炊飯器)のご飯を食べる寮の方がた、学部生、先生がたの励ましで今日という日を迎えています。一緒に東北震災支援にも加えていただきました。福岡にいますと、沖縄のニュースが入らず、基地関連の事件が少なくなったのかと思います。基地がないこと、そこから派生する爆音、事件事故、環境汚染がないということ。自分の安逸さを享受し、沖縄での出来事を他人事としてしていました。日本全体のことなのに全体の問題でないように錯覚しつつありました。沖縄では日常会話に出てくる基地関連の話は福岡では出ることもありません。人口 1% (沖縄の人口比) の沖縄が叫んでも届かない訳がわかりました。わたしたち、99% の民意が阻んでいたのです。「毎日、沖縄では命を削って平和を守ろうとしている人々がいます。福岡にいるわたし、神さま、貧しい器ですが用いてください」と祈りました。教会や連合での証の場が与えられました。感謝します。

後期授業が始まり、街路樹の紅葉が秋風に揺れる頃、講義での先生の言葉が理解できるようになりました。神学をフルコースのお料理に例えるなら、たった 1 年、香りだけを嗅ぎに来たというところでしょうか。「主よ、しかし、食卓の下の子犬も、子どものパン屑<sup>1</sup>はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家<sup>2</sup>に帰りなさい。悪霊はあなたの娘<sup>3</sup>からもう出てしまった。」(マルコ 7・28b, 29) 沖縄とずっと出会いたい。そして喜びを分かち合いたい。すべてのかたに感謝。

---

<sup>1</sup> 岡田読み込み訳 「パン屑のかおり」

<sup>2</sup> // 「沖縄」

<sup>3</sup> // 「娘たち」

## 《感謝をこめて》

研修教会：福岡国際キリスト教会  
推薦教会：新潟主の港キリスト教会

特別研修生 加山 献



常日頃から、祈りに覚え支えてくださっている全国諸教会の皆様、この場を借りて心から感謝いたします。2014年度は西南学院大学神学部にて研修生として在籍させていただく恵みにあずかり、他の神学生の方々と共に学びをはじめました。今年度はギリシア語、新約概論、旧約概論、キリスト教史、組織神学の講義を受けています。どのクラスも自分にとっては全く新しい内容であったり、今まで知っているようで知らなかった聖書の背景や教会の歴史を知ることができ、どれも自分の狭かった視野を広げていただける充実した学びです。そして私にはまだまだ分からないことが多いのだと痛感しています。

学びを続ける中であって、自分ははたして将来教会に仕える者として、また献身者として相応しい人間だろうかと自問することが増えてきました。確かに与えられたと感じていた召命は本物だろうか、もしかすると自分の思い込みではないか、と不安が心をよぎる事があることもしばしばです。このままの自分がいつか“牧師”と呼ばれる人になることが、この場所に来て、初めて恐ろしく感じるようになったのです。

しかし推薦するに値しないような者を祈りと共に送り出してくださった母教会の新潟主の港キリスト教会の皆様や、その他の多くの方々の祈りと想いを受け止め、自分の力ではなく、自分の思いではなく、私の弱さや愚かさにも拘らず、ただ主なる神が私をここまで導いてくださったと信じて歩みを続けていきたいと感じています。

末筆になりましたが、2014年度に奨学金をいただいた北関東地方連合壮年会の皆様にも誠に御礼申し上げます。そして福岡での研修教会である福岡国際キリスト教会の皆様、いつも教えてくださる先生方、共に机を並べる信仰の友、そしてすべてを備えてくださる主に、感謝は耐えません。来年の春からは選科生として学びを続けていきます。これからも皆様の祈りの内に覚えていただきたく、よろしく願い申し上げます。

## 7.編集後記

神学生と神学部のために祈りと尊き捧げもので、またよきお交わりにて日々支えて下さっている全国諸教会・伝道所の皆様へ。

「一人でも多くの神学生の顔と名前を、一つでも多くの教会に知っていただく」を合言葉に、今年度も对外委員会は神学部と全国諸教会の橋渡しのお仕事をさせていただきました。

今年度『道』に掲載致しました各神学生の胸の内、如何でしたでしょうか。すでに招聘教会が決まっている最終学年の学生、卒業論文で青息吐息の者、神学部初年度で難解な神学用語と戦っている者、それぞれ悲喜こもごもの中で学びを続けております。

神からの厳しい訓練に心が折れそうになっても、苦難や悩みが重くのしかかっても、皆様のお祈りとご支援の強力なバックアップに支えられ、七転び八起きで主にある希望と約束を見上げ日々奮闘しております。

主の僕として立たせていただくための神学生の学びと歩みは、今後も続いています。是非、お祈りに覚えて支え守っていただきたいと切に願っております。また皆様のご支援に心から感謝しつつ、バプテスト連盟に繋がるお一人お一人を、わたしたちも覚えてお祈りいたしております。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

心から主に感謝して。

2014 年度 西南学院大学神学部学生会对外委員会一同

### 『道』2014（年刊・第39号）

|     |                |
|-----|----------------|
| 発行日 | 2015 年 2 月 1 日 |
| 発行者 | 西南学院大学神学部学生会   |
| 編 集 | 神学部学生会对外委員会    |
|     | 余 信鎬 河端真理子     |
|     | 國分美生 福久織江      |
|     | 酒井朋宏 永松 博      |
|     | (学年順)          |